

宮沢賢治文学における地学的想像力（2）

—基礎篇・珪化木（Ⅱ）—

鈴木 健 司

Earth Science Imagination in the Literary Works of Miyazawa Kenji (2)

— basic study: petrified wood (Ⅱ) —

Kenji Suzuki

本稿は拙稿「宮沢賢治文学における地学的想像力（1）—珪化木（Ⅰ）および瑪瑙—（『文学部紀要21—2、文教大学、平20・3）の続稿で、宮沢賢治と珪化木・木化蛋白石との関係についてさらに追究する。主に、賢治が木化蛋白石を採取したとされる岩谷堂での調査結果、また、岩谷堂と同じ稲瀬層である花巻市矢沢高松産珪化木の調査結果をもとに、賢治が夢見た珪化木蛋白石の〈印材〉としての可能性などを実証的に考察する。

The present essay is a sequel to ‘Earth Science Imagination in Miyazawa Kenji (1) — petrified wood (Ⅰ) and agate—’ (Bulletin of the Faculty of Language and Literature, No. 21-2, Bunkyo University, Mar. 2008), and continues an investigation into the relationship between Miyazawa Kenji and petrified wood/wood opal. An empirical inquiry is made into the possibility of petrified wood/wood opal Kenji dreamed of as material for manufacturing personal seal (Japanese INKAN), based primarily both on the findings achieved from a field survey at Iwayadô where Kenji is said to have collected wood opal, and on a particular piece of petrified wood unearthed from the Inase Stratum at Yasawa Takamatsu, Hanamaki City, the same stratum as the one at Iwayadô.

一、瑪瑙木

童話「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」は、
ばけもの世界を舞台とした話であり、主人公のペン
ネンネンネン・ネネムは、ふとしたきっかけか
ら世界裁判長に出世する。次に引用するのは、出世
した主人公が、ばけもの世界長の官邸に挨拶に行く
場面である。

ばけもの世界長は、もう大広間の正面に座つ
て待つてゐます。世界長は身のたけ百九十尺も
ある中世代ミヤの瑪瑙木でした。

世界長の存在は化け物世界でもっとも高い地位と
考えてよいだろう。その世界長が「中世代ミヤの瑪瑙
木」であるということは、興味深い設定だと私は考
えている。

「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」には、
実に奇妙なお化けがさまざま登場する。その中にな

ぜ「中世代ミヤの瑪瑙木」が、お化け世界の「長」と
して設定されているのか。物語が基本的に荒唐無稽
な世界であり、作者にとつては単なる思い付きのレ
ヴェルだと主張されればそれまでだが、ここに地学
的視点を入れてみると、次のような推論も成り立ち
うることが分かる。

まず、「瑪瑙木」とは、分類としては（珪化木）
の範疇で、（木が石に化けたもの）ということがで
きる。それゆえ「瑪瑙木」の（化け物）世界での居
住が可能なのだが、それだけでは（化け物）世界の
「長」と遇されるには、根拠がまだ曖昧である。

そこで私の注目しておきたいことは、「瑪瑙木
（珪化木）」の成因である。中生代においては、あり
ふれた一本の木であったものが、死を経て瑪瑙に生
まれ変わったという点である。つまり、中生代（か
りに今から一億年前としよう）には、ただの（木）
であったものが、火山活動の活発化のため、火山灰
や砂礫などに埋まり、珪酸質を含んだ熱水にさらさ
れ、気の遠くなる年月をかけ、地中深く潜み、つい

にその身を瑪瑙と化したのである。「瑪瑙木」には、身を火や熱に投じて供養するというジャータカ（釈迦前世譚）風のところがあるのである。つまり、この瑪瑙の世界長は、釈迦が悟りを完成し黄金の身体をもつに至ったことと、わずかながらではあるが響きあっていると解釈でき、賢治はまたそのことに意識的であったのではないかと、推定できるのである。

傍証として、詩「樺太鉄道」〔『春と修羅』第一集〕の詩句を挙げておきたい。そこに、灼（焼）かれることと宗教性（大乘仏教）との関係が暗示されているからである。

（灼かれた馴鹿の黒い頭骨は
線路のよこの赤砂利に

ごく敬虔に置かれてゐる）

（一）、いらの樺の木は

焼けた野原から生えたので

みんな大乘風の考えをもつてゐる）

焼けた野原から生えた樺の木が「大乘風の考え」をもつている、というのである。これを「中世代の瑪瑙木」に重ね合わせれば、「中世代の瑪瑙木」という素材は、賢治の地学的知見により、宗教（大乘仏教）的意味合いが付されていると読み取ることが可能となる。

作品に登場する珪化木は、「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」のみだが、書簡には「岩谷堂産・木化蛋白石」のことが記されている。

二、木化蛋白石

木化蛋白石とは珪化木の一種であるが、瑪瑙化した珪化木と異なつて、蛋白石（オパール）化した珪化木ということになる。

木化蛋白石という呼び名は、Wood Opal の訳語である。大正五年四月発刊の鈴木敏編『宝石誌』（思文閣）には、「木化蛋白石 Wood Opal」の項に「樹木の有機物は珪酸液の滲入に依り蛋白石化せられ、之を切り琢磨せば木目を現し、装飾に用

ひ美観を呈するものあり、タスマニアのホバート Hobart 匈牙利のクレムニッツ Kremnitz 北米のコロラド Colorado 等は著名の産地にして、我国又其産地に乏しからず、岩代安達郡二本松、磐城石川郡石川山、豊前田川郡津濃等「あり」と記述されている。

また JAMES. D. DANAG の DESCRIPTIVE MINERALOJY、(SIXTH EDITION 1914) に「Wood Opal」として「Wood petrified by opal: sometimes called lithoxyle when showing a woody structure.」という記述が見える。(オパールによって石化した木、木の構造を現している場合、時としてリソクシルと呼ばれる。)といった内容だが、この本は、賢治が大正七年(六月)の父政次郎宛書簡中、仙台の古本屋で「デナ著 鉱物学教科書」を「新価格」「八、〇〇円」のところを「古価格」「五、〇〇円」で購入した、と報告しているそのデナの書と推定される。

三、賢治と岩谷堂

賢治が東京小川町の水晶堂や金石舎に持ち込んだ木化蛋白石は、(岩谷堂)で採取されたものであることが書簡の記述から分かるが、賢治は、岩谷堂のどこから木化蛋白石を採取したのだろうか。それは、岩谷堂付近に露出している稲瀬層とよばれる地層からだろうと推定される。『江刺市誌』第一巻、通史篇「江刺の自然」の「(3) 新生界」「1 第三系」の項を参考に、稲瀬層についてポイントをまとめると次のようになる。項目執筆者は中田剛氏である。

(一) 稲瀬層は、地質学の時代区分でいう、新生界・第三系・中新統(二二〇〇万年〜二五〇〇万年)に属し、海底火山活動によって出来たもので、安山岩・安山岩質集塊岩を主体に、凝灰岩・凝灰岩質砂岩および礫岩などから成っている。

(二) 稲瀬層は、北上川東岸一帯に分布。市内稲瀬

を中心に、北は矢沢から市内田原に至り、東西約一〇キロメートル、南北三〇キロメートルにわたる。

(三) 稲瀬層には、ミズナラ・クヌギ・ブナ、メタセコイヤの葉の植物化石や、カガミ貝・ソデ貝・ノムラナミ貝・マテ貝などの貝化石が見られる。また、葦などの植物化石が混入しており、稲瀬層が浅海に堆積したことを示している。

(四) 岩谷堂重染寺八甲道路崖、根岸、梁川、等の稲瀬層中から良質の珪化木が、発見されている。いずれも、セコイヤセンパービレンスの珪化木であり、メノウ化している。

賢治が岩谷堂に行ったことを示す確実な証拠は、大正六年（八月）二十八日の日付を持つ保阪嘉内宛の葉書である。賢治は葉書表に「岩谷堂町にて」と記し、裏に「今日当地へ来ました。あしたから十日ばかり歩きます。これから暫く毎日御便り致します。

今日はまだあまり気が進みませんからこれで失礼します」と記している。夏休み期間を使って、友人の高橋秀松、工藤又治と一緒に、江刺郡一帯の地質調査に出かけたのである。

書簡で賢治らの足取りを確認することができるが、すでに、宮城一男の『宮沢賢治の生涯―石と土への夢―』（筑摩書房、昭55・11）や井上克弘の『石っこ賢さんと盛岡高等農林―偉大な風景画家 宮沢賢治―』（平4・5）に、詳しく述べられており、参考になる。

八月三十一日は、岩谷堂という町から五キロ南下した羽田村の田茂山、九月二日には山深い伊手村、九月三日には米里村の人首。ここで、保阪との通信は切れるが、その後一行は、五輪峠から種山へと向ったものとおもわれる。そして、最初の予定どおりとすれば、九月八日前後に帰花したことになる。

さて、この地質調査の目的は、北上山地を構

成する中生代く古生代の岩石や地層を見ることがあったとおもわれる。とりわけ、種山高原が
一帯が最終目的地であったであろう。

（宮城一男著『宮沢賢治の生涯―石と土への夢―』）
なぜ岩谷堂町が、地質調査の最初の地であったのか。その理由の一つとして、当時岩谷堂町が江刺郡の中心地であったことが挙げられるだろう。岩谷堂町は、北上川を用いた水運業の一大集積地であった。当然、宿泊上の都合がよかったと考えられる。ただ、葉書を出した翌日（二十九日）と翌々日（三十日）の両日岩谷堂町に滞在した可能性があり、岩谷堂地区それ自体を地質調査の目的地の一つとしていたとも考えられる。そうすると、宮城の推定する「中生代く古生代の岩石や地層を見ること」だけが目的ではなく、新生代・稲瀬層の観察やそこに埋まっている珪化木の採取も、予定の行動であった可能性が生じるように思う。

稲瀬（火山岩）層という地学的名称の成立は、昭

和二九年のことであるが、岩谷堂の重染寺ちよせんじ峡谷は人首川の浸食作用によってつくりだされた稲瀬層の絶好の観察地であり、賢治にとつて地学的興味を誘う場所であったと考えられる。『江刺の地学』（江刺市教材センター・江刺理科教育研究会、昭46）に、重染寺地区の地学的特徴が詳しく記されているので次に引用する。

この辺一帯を重染寺といっている。ここは両方切り立った高い崖になっている。葛西氏（江刺氏）がこの辺一帯を天然の堅固な要害と見て柄杓ヶ城を構えたのもむべなるかなと思われる。この重染寺の谷間は、国見断層（北上市の南東から岩谷堂増沢雲南田に至る北西から南東方の断層）の影響、作用を受けながら、人首川の流水が、稲瀬火山岩層を長い時間かけて削り取ってきたオウコク（横谷）（川が横切ってきた谷）であると云われている。普通の谷は縦谷であつて、江刺においても横谷は珍しく貴

重なる存在である。

(中略)

重染寺峡谷の地層上部、稲瀬火山岩層のなかに良質のメノウ化したセコイア・センパードレンスの珪化木が露出している。この附近からは、一般に多量に産出する。又同じく上部砂岩層中からは、メタセコイアの葉、広葉樹の葉の化石が、多量に産出する。

重染寺の崖(切り通し)を見ると(後掲のルートマップ参照)上部よりカザンカクレキガン(火山角礫岩)、カザンレキギョウカイガン(火山礫凝灰岩)、ギョウカイカクレキガン(凝灰角礫岩)、火山礫凝灰岩、ギョウカイガン(凝灰岩)、凝灰角礫岩の順に堆積した地層が露出している。便利な場所でもあり、珪化木、化石、稲瀬火山岩等、地層の学習ヶ所として、まことに好適である。

重染寺切り通しは、大東亜戦争直後に完成したもので、対岸を通っていた県道がこの場所に

移り、市街地も裏町化した形に一変し今日に至っている。

道路開発以前の重染寺峡谷は、もともと谷中がせまく、稲瀬火山岩の奇岩怪岩が、川岸に迫り、その姿が、枝ぶりの良い樹木とともに、水面に影をおとし、幽谷の観を呈していた。(道路掘削工事は、岩谷堂国民学校に師団本部を置いた、八甲部隊の兵士達が、その任にあたったので、この切り通しを「八甲切り通し」という。)

宮沢賢治文学における地学的想像力 (二)
 —基礎篇・珪化木 (II) —

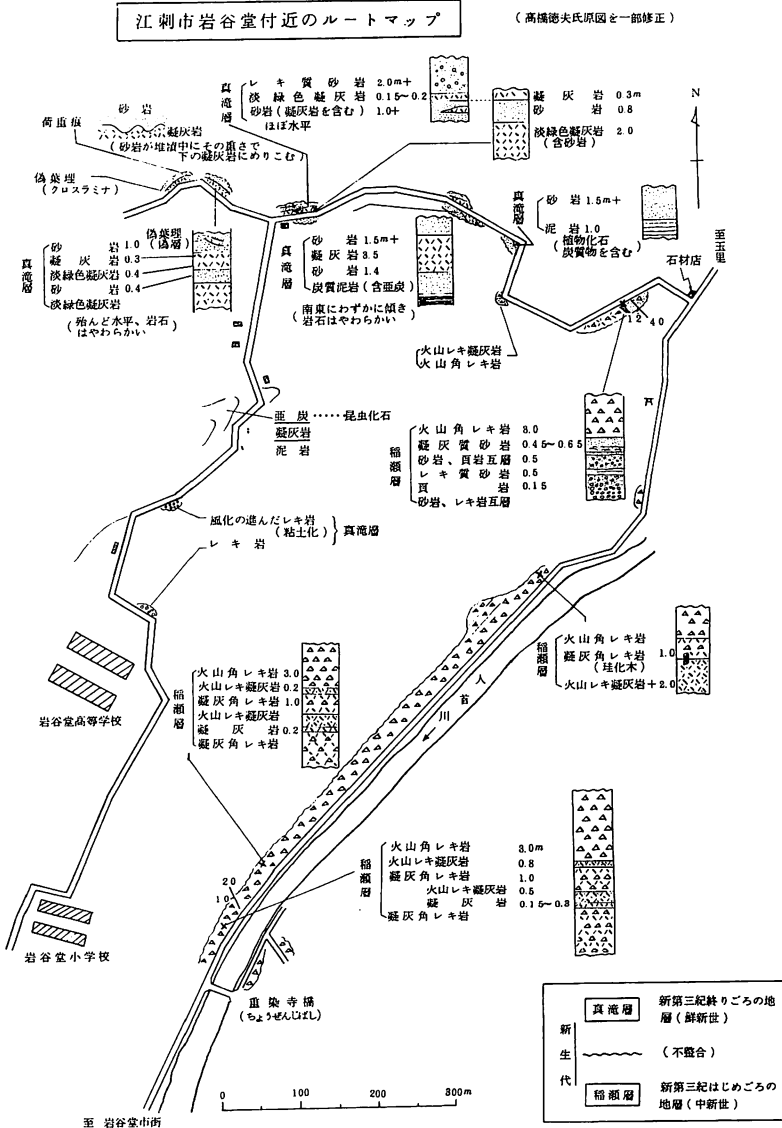


図1 (『江刺の地学』より)

現在は人首川の両岸に道路があるが、大正時代は片側だけであった。前掲の図1「ルートマップ」に示される稲瀬層の露頭は、戦争中の道路工事により現れたもので、賢治がそれを観察した可能性はない。その露頭も現在ではコンクリートが吹き付けられ、露頭を観察することはできない。逆に、賢治の頃は、川岸のいたるところに稲瀬層の露頭が存在していたと考えられ、珪化木を採取することは比較的容易であったと推定される。

別稿(前出)ですでに取り上げたことだが、大正七年十二月の父政治郎宛書簡に見える「岩谷堂 木化蛋白石 二個」は、この地質調査(大正六年八月)の折りに採取した可能性が高い。しかも、「木化蛋白石」という表記が、前出『江刺の地学』の「良質のメノウ化した」という記述と内容的に合致している点が見逃せない。「木化蛋白石」はオパール化した珪化木のことであり、「良質のメノウ化した」珪化木も実は、「メノウ」ではなく、「メノウ」のように見える「オパール」のことである。樹種と

しては「セコイア・センパービレンス」ということだが、この地層にはメタセコイヤ(針葉樹)やクヌギ・ナラ(広葉樹)などの化石も発見されており、賢治の採取した珪化木の樹種に関しては確定的なことをいうことができない。

いずれにしても、「この附近からは、一般に多量に産出する」ということであり、賢治の採取した木化蛋白石が岩谷堂の「重染寺峡谷の地層上部、稲瀬火山岩層」からのものであったことは確実性の高いことのように思われる。

さて、賢治はこの木化蛋白石を印材用として東京の宝石店(水晶堂)に引き取ってもらう予定であった。しかし、板谷英紀が早くから指摘しているように、「蛋白石」自体は印材に適さないのである。

ここ(賢治書簡のこと―注・鈴木)で印材用と書いていますが、オパールはもろくてとても彫り物の材料にはなりませんし、すぐ後に木化蛋白石とあるところからしても、これは珪化木

のことをさすものと思われる。珪化木というのは大古の樹木の遺骸に珪酸を含んだ水がしみ込んで石化したもので、硬さもかなりありますし磨けばよく光りますから印材には向くかも知れませんが。外国ではテーブル板やブックエンドなどによく使いますので、原石屋の広告にも petrified wood とか silicated wood といった名前がのっています。

『賢治博物誌』（れんが書房新書、昭54・7）
板谷は、「木化蛋白石」を「珪化木」と読み替えることにより、蛋白石のもろさの問題が解決されると、考えたのである。

しかし、板谷の推定には難点があり賛成ができない。蛋白石化せず石英（玉髄）化した珪化木ならば、硬度は水晶と同じであり、印材に適す可能性を残すといえるだろう。海外産の珪化木や国内産でも板谷のいわんとするような珪化木の存在することは承知しているが、一般的にいった場合、単に石英化

した「珪化木」は美観の上で印材として適さないことが多く、商品にならない。つまり、珪化木であることが必ずしも（印材）として適しているという保証にはならないのである。岩谷堂産の場合、やはり美しい色彩をもつ蛋白石化した珪化木であることを条件に加えざるをえないように思う。賢治自身、珪化木ではなく木化蛋白石と記していることを確認しておきたい。だとすれば、蛋白石（オパール）化した珪化木は、やはりそれなりに「もろい」のであり、印材には適さないとなる。

私見としては、賢治の採取した木化蛋白石が、どの程度蛋白石（オパール）化した珪化木であったかということがポイントとなると考えている。一口に木化蛋白石といっても、実際には多種多様である。賢治の採取した木化蛋白石は、どの程度蛋白石化した珪化木だったのか、それを知るためには、同じ岩谷堂から産出した珪化木の標本を数多く調査し、比較・検討の資料とすることが有効であるように思われる。

私が調査・確認することのできた岩谷堂産珪化木は、六点(写真1〜6)、その他参考になるものは二点(写真7、8)である。岩谷堂産の珪化木の特徴は、通常目にする珪質化(石英化)した地味なものが見られないことである。標本のほとんどが蛋白石化した美しい珪化木であり、『江刺の地学』の執筆者が「メノウ」化したと表現した気持ちがよく理解できる美しさであった。ここで確認しておくが、「メノウ」は石英の極めて細かい粒子からなるもので、「オパール」とは成分が異なっており、木化蛋白石がメノウ化することはないことである。

写真1〜5は見事に蛋白石化しており、おそらく印材用としては「もろくて」向かないと考えられる。ただし、ここでいう蛋白石化は科学的分析を経たものでないため、最終的な結論ではない。本来は科学的分析(偏光顕微鏡での薄片観察やX線回折分析など)を行って判断すべきだが、写真1〜4は「江刺郷土文化館」の所有、写真5、6は栗谷川寛衛氏(盛岡サイエンス)所有の事情があり、標本を削る

必要のある科学的分析は行っていない。

もっとも、個人的には蛋白石化した珪化木に関し、かなりの数を扱う経験をしており、また、他の標本を国立科学博物館に依頼し科学的分析を行っていたことも幾度かあり、おおよそを判断することは可能と考えている。そのような経験からいうと、写真6は蛋白石化しておらず、石英化したタイプの珪化木だと思われる。したがって印材用の硬度としては十分と推定されるが、印材の美的要素を満たさず、商品にならないと判断されるだろう。

写真7は私が岩谷堂の稲瀬層の崖から採取したもののだが、残念ながらどのような理由でか珪化が途中で止まってしまっており、柔らかな状態で崖の中腹に埋まっていたものである。写真8は、岩谷堂からほど近い藤里地区からのもの。地層は岩谷堂産と同じ稲瀬層であり、岩谷堂産と同質の可能性が高いと判断できる。藤里の珪化木は、巨大で立ち木のままの出土ということもあり、岩手県の天然記念物に指定されている。金網小屋で保護されており、写真は

金網越しに珪化木の内部の見える箇所を写したものである。観察した限りでは内部は見事に蛋白石化しており、やはり、印材には向かないと考えられる。『藤里郷土誌』（藤里郷土誌編集委員会、昭61）などでは、この珪化木を「メノウ」化したものと紹介しているが、おそらくは蛋白石である。

四、花巻市矢沢高松産珪化木

稲瀬層は北上市稲瀬町にある国見山付近の岩相を標準にして付けられた名称で、「北は矢沢から」と『江刺市史』に記載されていたように、花巻市矢沢が稲瀬層の北限となっている。東北新幹線新花巻駅付近が矢沢地区であり、新花巻駅からほど近い宮沢賢治記念館の建つ胡四王山も稲瀬層である。偶然ではあるが、記念館の建設中に土中より珪化木が現れ、しかも見事な木化蛋白石であった。その一部は現在でも保存されており、記念館のテラスに置かれている（写真9）。

清水孝氏が季刊『タウンやさわ』第26号（矢沢

観光開発協議会、平18・11）に、「やさわの珪化木（メノウ）」と題して、矢沢地区から出た珪化木について寄稿している。私が矢沢の珪化木の存在について知るに至った経緯は単純ではないが、結果だけ述べれば、賢治が江刺（現奥州市）の岩谷堂から採取した珪化木は、宮沢賢治記念館のある胡四王山から出た珪化木とは兄弟のようなものであり、ともに美しい木化蛋白石である点に興味深い共通点が指摘できる。清水氏によれば、「昔から高松、駒板の農家の人は木石きいしと言って庭に飾ったりして普通に知っていました。但し天然記念物になるほどの大きいもの（藤里の珪化木）は天然記念物として指定されていることをさす―注・鈴木）が出なかつたので、一般の矢沢の人達は知らなかつたのです」ということである。賢治が「矢沢の珪化木」の存在を知っていたかどうか、それを示す資料はなく、偶然の一致としておくほかはないが、清水孝氏や同じ高松にお住まいの小原昇氏のご好意により、さまざまな種類の珪化木を、合わせて百数十キログラムに至るほど

頂戴することができた。賢治が岩谷堂で採取した珪化木を考察、推定する上で、同じ稲瀬層から出た珪化木を多数調査することができたことは、この上もなく幸運なことと感じている。

かつて胡四王山に宮沢賢治記念館を建設する為に基礎工事をしていたら太さ二〇cm長さ一・二m位の珪化木が数本出ましたが当時の市役所の教育委員会の面々は全く無関心でしたので殆ど散逸してしまいました。施工会社の好意で径一五cm×長さ一m位の珪化木一本が賢治記念館の何処かに展示されている筈です。

その後数年前の花巻、釜石間高速道路の工事で高松第32地割（上駒板）の山を削り貫いた時にも大量に珪化木が出てきました。早速市役所にも知らせましたが全然反応はありませんでした。太さは直径一m位の物も出ましたが工事の方法が発破を掛けて砕きましたので殆どは砕けてしまつて原型の俣の出土はありませんでした。

それでも工事関係の人たちは珍しがつて相当量持ち帰つたようです。上駒板公民館にも重さ百kg程のものが一個記念に置いてあります。

（前出『タウンやさわ』）

見せていただいたり、頂戴したりした珪化木の多くは、木化蛋白石と呼ぶことのできるものである。この点に関して、国立科学博物館の宮脇律郎氏（地学研究部・鉱物科学研究グループ）に、見かけの異なる三点の標本（写真10〜12）をX線回折分析と薄片の偏向顕微鏡観察で調べていただいたところ、「これらの標本は非晶質を主体とし、極小粒のトリジマイト、極小粒のクリストバル石、場合により極小粒の石英を含む標本と言えます」「結論としては、これらの標本3点は珪化木の蛋白石と言っても良い、との判断に至りました」との結果を得ることができた。

しかし、木化蛋白石といっても、さまざまな質や色や形態があり、とても三点で標本全体を代表させ

ることはできない。さらに、宮脇律郎氏に調べていただいたのは、標本の鉱物としての鑑定である。岩谷堂産の珪化木と比較するためには、全標本を系統立てておきたい。そのためには、最低限、樹種の同定が必要となるだろう。だが、別稿（前出）で触れたが、珪化木に関して樹種の同定のできる専門家は日本に二人しかおらず、同定作業を引き受けていただくことだけでも大変な事情がある。幸い、国立科学博物館へ寄贈（寄贈者名、清水孝・小原昇）した九点の標本に関してだけは、地学研究部生命進化史研究グループの植村和彦氏のご好意で、福井県立恐竜博物館の寺田和雄氏に樹種の同定依頼が行なわれ、その結果、マツ科・スギ科・ツツジ科・コナラ・ブナ・サワグルミと、八点中六つのタイプが認められたこと、これは材化石群としては多様性に富む群集といえること（通常は、一種類か多くて二〜三種類ということが多い）が判明した。一点は樹の細胞の形が残っていないため樹種の同定が不能であった。ただ、今回の同定は簡易なもので、正確には珪化木

を横・縦・斜めの三方向から切断し、三種の薄片を作成し観察しなければならぬということであった。植村氏から、矢沢高松産の珪化木は、樹種が豊富であり、さらに新たな樹種も期待できるとのこと、今後時間をかけ科学博物館で薄片作り作業を行い、最終的には恐竜博物館の寺田和雄氏の協力を得たうえで正確な樹種の同定を行いたいとの意向が示された。そこで、私の手元にある珪化木を百キログラムほど国立科学博物館にお預けすることになった。樹の細胞が全く見えない標本は薄片を作成しても意味がないので、手元に残してある。矢沢高松産珪化木の多様性を示す標本として、さらに八点ほど写真で紹介しておきたい（写真13〜20）。

今の段階で断定的なことはいえないが、珪化木の蛋白石化の意味では、岩谷堂産も矢沢高松産も、ほぼ同質に感じられると指摘しておきたい。いわゆる「メノウ化」した珪化木（蛋白石化と判断されるが）も、岩谷堂産同様、矢沢高松産からも確認できる。写真5、8と写真9、11、13、16がそれにあたるだろう。

木目が美しく残っている写真1、2と写真14にも共通性が見出せる。写真6にあたる珪質（石英）化した珪化木についても、同様のものを矢沢高松産から複数見出すことができる。ただ、その標本は科学博物館に寄贈した標本、貸与中の標本の中にあり、ここで紹介することができない。

樹種に関してだが、岩谷堂産は全てが「セコイア・センパーパーレンス」と同定されており（前出資料）、矢沢高松産の多様な樹種との相違は大きい。同じ地質時代でもわずか三十キロメートルほどの距離の違いが、なぜこれほどまでの樹種の相違を生じさせたのか、専門家に任すべき課題かもしれない。また、写真18〜20などの標本はちよつと見ただけではもとが木であったことすらわからないほど変化しており、もとの木は何だったのか、なぜそのような色になったのか、現時点では判断不能としておくほかない。また、岩谷堂産の場合は、樹種の同定といつても時期的にかなり以前の段階のもので、樹種の同定に関しては、あらためて今日的レベルで再鑑

定する必要があるのではないかと考えている。また、もう少し数多くの標本を調査できれば、また異なった種類の木が確認できるのではないだろうか。ただし、「えさし郷土文化館」学芸員・野坂晃平氏のお話によれば、現在確認できるものは今回私が紹介したのだけであるということであった。

五、賢治の夢（印材としての可能性）

岩谷堂産の珪化木で調査しえた標本にかぎった場合、賢治が将来の夢を託した木化蛋白石に〈印材〉としての適性はないというのが結論であるが、範囲を矢沢高松産の珪化木に広げて考えた場合少し異なった賢治の将来が浮かんでくる。科学博物館で鑑定していただいた三点の珪化木は、ほぼ全体が蛋白石であるとの結果なのでやはり〈印材〉としては不適当ということになる。しかし、多くの標本の中のいくつかは〈印材〉としての適性を持つのではないかと考えられるものがあつた。写真21がその一つだが、百パーセント蛋白石というのではなく、かなりの割

合で石英を含むと推定されるものである。素材の美観と硬度とを兼ね備えた標本といえるものである。

私は、賢治の夢を実現させてみるべく、写真21を本学教授の鈴木右衛門氏（美術・石彫）にお願いし、氏がアトリエにお持ちの巨大なダイヤモンドカッターで、立方体に切り落としていただいた。さらに、それを印鑑の機械彫り専門店に依頼し、三センチメートル四方の面に、篆書体で凸型に「宮沢賢治」と彫りこんでもらった。写真22がそれである。何度押しても字の欠けることはなく、十分に印鑑としての使用に耐えうるものであることが分かった。ただし、石の目の粗さの関係で、細かい字を掘りこむには不適であると感じた。

機械彫りを依頼した判子屋店主の話では、刻む前の工程である面取作業が、石材の硬さにより予想外に時間がかかったこと、ただ字を彫むこと自体には困難はなかったとのことである。珪化木も元の木と同じように、年輪に対し横に切るより縦に切る方が容易なようである。押した感じを専門家の立場

からどうかと尋ねたところ、「中の下」というお返事だった。印鑑の素材としては、木では柘や楓、動物では象牙や水牛の角、鉱物では瑪瑙や水晶などが一般的だが、賢治の考案した岩谷堂産木化蛋白石は、印材としての商品価値としてあまり高くなかったようである。それゆえだろうか、木化蛋白石についてその後書簡で触れられることはなかった。

最後となったが、江刺郷土文化館、国立科学博物館、盛岡サイエンスの関係各氏、花巻市矢沢の清水孝氏、小原昇氏、本学教授の鈴木右衛門氏のご協力に厚く感謝申し上げます。

（了）



写真 1



写真 2



写真3



写真4



写真 5



写真 6



写真7



写真8



写真9



写真10



写真11



写真12



写真13



写真14



写真15



写真16



写真17



写真18



写真19



写真20



写真21

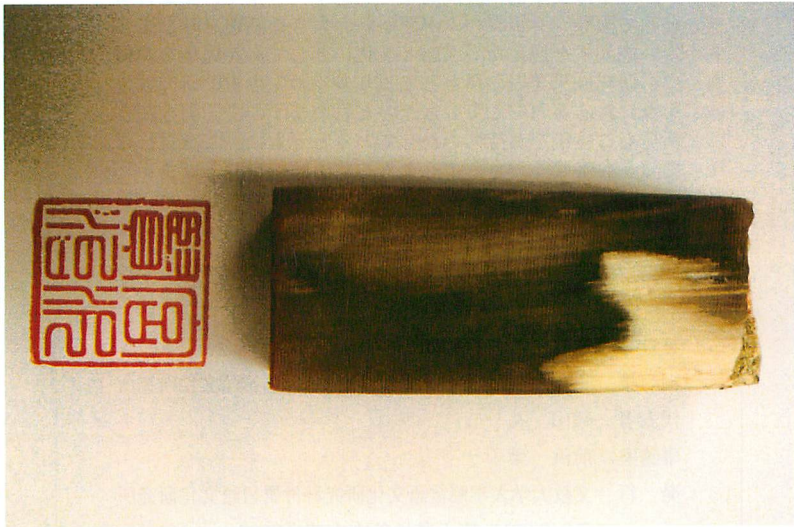


写真22